

国際シェリー学会(New York 1992 5.20-24)に参加して

石川 重俊

本年、1992、はP.B.Shelley生誕200年に当たる。これを記念して国際シェリー学会が5月20日から24日にかけてニューヨークで開催された。正式には

SHELLEY, POET AND LEGISLATOR OF THE WORLD, 20-24, MAY 1992

と標榜された。“Sponsors”として七つの機関、団体がその名を連ねている。即ち、The Keats-Shelley Association of America; The Carl and Lily Pforzheimer Foundation; The New York Public Library; The Graduate School and University Center of the City University of New York; The CUNY Academy for the Humanities and the Social Sciences; The American University, Washington, D.C.; The University of Pennsylvania; そして National Endowment for the Humanities の助成を受けている。

(周知のように The Keats-Shelley Association of America は *The Keats-Shelley journal* を刊行し、The Carl and Lily Pforzheimer Foundation はシェリーの手紙類やノート・ブック、その他、数多くの MSS. を収集し、Pforzheimer Library としてニュー・ヨーク市公立図書館に保有している。1961年以來、Kenneth Neill Cameron 氏の編集、1973, Vol.5 以降は Donald H. Reiman 氏の編集で、*Shelley and His Circle, 1773-1822* (全8巻) を刊行している。)

“Conference”のプログラムは基調主題のもと5つの発表と、13の主題のもと37の発表で構成されてあった。それは、研究発表の要請の書簡の中で表明された基本理念を具体化したものであった。書簡は次のように述べている。

Our purpose is to consider Shelley as poet, philosopher, political visionary, and cultural reformer against a world backdrop. Specific concerns might be the sources and aim of Shelley's internationalism, his idea of poets as unacknowledged legislators, his legacy within nationalist reform struggles of the nineteenth century and passive resistance movements of the twentieth century, his recent emergence as a forerunner of post structuralist philosophy and linguistics and how that notion can be reconciled with his politics, the effect of new textual scholarship, the diversity of Shelley's impact and the enduring values of his poetry on a world scale.

基調主題は Shelley in His Time. そして13の主題は、I Shelley in His Time. II Constructing Shelley. III Shelley and the Past. IV Shelley and Contemporary Politics. V Shelley and Political Establishments. VI Shelley and the Modern Political Establishments. VII Shelley in the Socialist Experiment. VIII Shelley in Eastern Europe (パネル及びリスポンス). IX Shelley and National Culture. X New Textual Horizons (パネル). XI The Other Texts. XII Shelley and the Quotidian. XIII Shelley and the Post-Modern.

以上のように基調主題の5つの研究発表を加えると42の研究が発表されたことになる。すべての研究発表にディスカッションが行われることはなかったが、その中で主題Ⅷと主題Ⅺは「パネル」として設けられ、活発なコメントや質疑の対話が繰り広げられた。特に、後者には“RESPONSE”が置かれたことは特に好ましいことと思われた。それは、高度の研究に対する高度の研究をもって対応する研究的対話であるからである。示唆するものは多い。また、研究の展望を広げるものもある。

これらの多数の研究は一見すると、ただ絢爛、多彩の感を与えるかも知れないが、そこにある統一性“consistency”に注目しなければならない。即ち、掲げられた標榜“SHELLEY, POET-AND LEGISLATOR OF THE WORLD”への集約である。ここでは研究発表のテーマと内容を詳述することは不可能であるが、基調主題の五つの研究発表は「時代」に向かって高らかにそのことばを発した人間としての、また“Unacknowledged Legislator”としての詩人シェリーの姿を浮彫りにし、それに続く37の研究発表は順次、同時代とシェリー、シェリーの理論の構造や影響、シェリーと「過去」、同時代政治、政治体制、現代の政治体制、社会主義実験、東欧とシェリー（パネル）、(国民)文化・文学への影響、MSS校訂、原典研究の現在と展望（パネル）、新全集・散文・書簡、ポストモダン、という13の主題のもとにおける研究を吸収しつつ、標榜に集結していく。私は初めに「13の主題の展開」と言ったが、それは、形態に注意を喚起するためであった。この展開という形態が集約に止揚される意味の力学に示された“Scholarship”こそが、シェリー生誕二百年記念国際学会を意義あらしめたものであることを感動をもって噛みしめた。

今回の42にのぼる研究の中で、聴衆に最も感銘を与えたと確信するのは、*Shelley and His Circle*の編纂者、Donald H. Reiman氏から、MSS.研究の成果としての、新しいシェリーの全集が刊行されるという発表、ミズーリ大学のE.B. Murray氏の「シェリー散文集」、サンディエゴ大学のMary Quinn氏の「新書簡集」刊行計画にかかわる研究の発表であった。また、特筆すべきは*The Bodleian Shelley Manuscripts, Volume VIII* (Bodleian MS. Shelley d.3), Garland, 1988をもって既に世界に高名な床尾辰男氏の今回の詳細なハンドアウトを伴った*Epipsychidion*のMS.研究は、この作品の今後の研究にも多大の影響あるものとして最高の評価をもって迎えられたことである。また、原田博氏編集「日本におけるシェリー研究年表」にも多くの人たちから関心が寄せられた。主題 IX #25 “Shelley Studies in Japan”(石川)は、日本のシェリー研究の軌跡をたどり(文人たちへの刺激などにも触れはしたが、“The Fabian Society”などを生むような文化と受け皿を異にする日本では、シェリーの思想的影響は殆ど挙げるに足りない)主眼は、シェリー研究の成長と展望に置かれた。そして、日本の将来のシェリー研究は、床尾辰男氏のMS.研究業績や、原田博氏の書簡研究に根差すSanuel ParrやRobert Fellowesの発掘研究などに新しい“horizon”が展望されることを結論とした。さらに、日本におけるシェリー研究に貢献しつつあるイギリス・ロマン派学会の貢献及び、文教大学図書館の「シェリー・コレクション」の紹介もなされた。特に、「コレクション」はReiman氏を始めとし、Pforzheimer Foundation 関係者たちは大きな関心を示すところとなった。